

ファンタジーとイリュージョン

—フロイトの宗教論と芸術論についての—考察—

田 口 博 子

本論では『ある幻想の未来』と『文化への不満』に見受けられるフロイトの宗教批判の特徴を抽出することを主題としたい。これらの宗教批判論では宗教に対して「イリュージョン」⁽¹⁾という言葉が遣われている。フロイトの他の著作の中で「イリュージョン」は殆ど使用されていないが、芸術や夢や神経症の症候には「ファンタジー」という言葉が多用されている。今まで余り顧みられなかったこの言葉の遣い分けに注目して、宗教批判論では「イリュージョン」と「ファンタジー」の区分が宗教と他の現象、特に——隣接現象、時には同類と見做される——芸術・夢・神経症との相違を解明する鍵ではないかと考え、両者を比較することで宗教批判の特徴が掴めるのではないかと想定した。

更に、「イリュージョン」が批判されるべき存在である理由は、集団との関連が問題視されているのではないかという推測のもとに、集団心理を分析した『集団心理と自我の分析』を考察する。その分析を下敷きにして、同一化・惚れ込み・自我理想などの概念が示唆する、集団と宗教と他の文化現象との関連を明確にすることを試みた。

尚、表記について予め付言しておきたい。「Illusion」は通常「幻想」と邦訳され、「Phantasie」は「空想」と翻訳される。ところが精神分析用語を翻訳する際に使用したラブリッシュ、ポンタリスの「精神分析用語辞典」⁽²⁾では「Phantasie」は幻想と訳されている。また、精神分析の領域でも「ファンタジー」は広く幻想とされている。そこで本稿は「Illusion」をそのまま「イリュージョン」、「Phantasie」を「ファンタジー」として、「Phantasieren」だけは適切な語が見当たらなかったの従来通り「空想する」と表記することにする。

1. ファンタジーの諸相

ファンタジーとイリュージョンの差異を明確にするために、先ずコンテクストに即してこの二つの言葉の遣われ方を見ていきたい。本章ではファンタジーに関連するフロイトの著作群を正常人の観察から得られた夢に就いての知見、症例と症例を基礎にして作り上げられたメタ心理学、精神分析の芸術作品への適用という視点から、便宜上1. 夢に就い

ての理論、⁽³⁾ 2. 神経症の症例及びメタ心理学, 3. 芸術論に分類した。

a. 『夢判断』におけるファンタジー

ファンタジーは、夢が形成される一連の過程と深い関連を有している。ファンタジーと夢の関連を考察する前に、「夢の作業 (Traumarbeit)」と呼ばれるこの過程に就いて若干説明をしておきたい。夢が形成される場合には、二種類の心的作業が行われる。それは「夢思想の生産と夢思想の夢の内容への変換」であり、後者がいわゆる「夢の作業」である。「潜在内容 (latenter Inhalt)」とも呼ばれるこの夢の思考 (Traumgedanken) は、無意識の産物であり、夢を見ている人の欲望の正確な表現である。他方、顕在内容 (manifestierter Inhalt)」とも呼ばれる夢の内容 (Trauminhalt) は、夢を見た人が目覚めた後に思い出したり、物語ったりするものである。夢の思考は夢の内容に先行し、前者を後者に変換するのが夢の作業とすれば、逆に後者から前者に遡るのは精神分析医の解釈作業である。⁽⁴⁾

夢の作業は、圧縮 (Verdichtung) ・ 置き換え (Verschiebung) ・ 形象性への配慮 (Rücksicht auf Darstellbarkeit) ・ 二次加工 (sekundäre Bearbeitung) という4つの行程から成り立っている。夢の中で様々な人物が一人の人物としてあらわれたり、一つの主題・人物などだけが色々な夢に何度もあらわれたりするの「圧縮」の働きであり、ある表象のアクセント・関心・強度が別の表象に移ることが「置き換え」である。また、夢思想の抽象的な表現は「形象性への配慮」に依って、言葉あるいは具体的なイメージで表現されるようになる。このように、圧縮・置き換え・形象性への配慮という作業を経た夢思想から、脈絡の無い部分や欠落した部分を取り除き、選別と添加を行い、ある程度理解可能な形に修正する働きが「二次加工」である。⁽⁵⁾

次に、「夢の作業」と関連させながらファンタジーの特徴を見て行きたい。夢と関係するファンタジーの性質として、次の3点を挙げるができる。

まず、ファンタジーが白昼夢と類似点を有していることである。白昼夢 (Tagtraum)⁽⁶⁾ は覚醒状態に於いて想像されるシナリオであり、『夢判断』ではファンタジーと同義語として使用されていて、欲望充足 (Wunscherfüllung) であること・大半が幼児期の体験に関する記憶に起因していること・二次加工の影響を受けているという点に於いて夢と類似している。⁽⁷⁾

次に、夢思想とファンタジーの関連である。夢思想の素材の中に既に出来あがった形成物が存在していて、その為夢の作業を殆どしないで済む場合があり、「私が注目している夢思想の要素を『ファンタジー』と呼ぶのが常である…」と述べられている。ここではファンタジーは夢思想の要素と把握されている。しかし、夢とファンタジーとの関係は複雑で、ファンタジーが夢の中に變形を被らずに現れている場合もあれば、一部分だけが暗示として現れる場合もある。この事実は、夢が成立する際に受けた条件の複雑さに由来し

ていて、「夢がファンタジーを形成するのではなく、夢思想の形成に無意識的なファンタジーの働きが大きく関与している。⁽⁸⁾」

次項で言及することになるのだが、最後は無意識との関連性である。夢の作業の「第一部は前進的に無意識の場面あるいはファンタジーから前意識に広がる。第二部は検閲の境界線から再び知覚に抵抗して赴こうとする。」夢の作業の第一部（圧縮・置き換え・形象性への配慮）でファンタジーは局所論的な意味⁽⁹⁾での無意識の段階に所属している。⁽¹⁰⁾

夢とファンタジーの関連を要約してみると、ファンタジーは夢の要素であり、夢を形成する際には既成のファンタジーが利用される。つまり、夢の作業の起点と終点にファンタジーは関わりあっていて、起点では無意識の欲望と結び付き、終点では二次加工に関与している。そして、最初と最後に現れるファンタジーは内部で繋がっていて、互いに他を象徴し合っているということが言える。

b. 神経症の症例及びメタ心理学に於けるファンタジー

ここでは、神経症に於けるファンタジーの機能を考察したい。フロイトの精神分析の出発点は神経症患者の診察という臨床体験であり、ヒステリーについての報告は、ファンタジーとヒステリー症状は如何に縁が深いかということをも物語っている。従って、ヒステリーについての論文から、そのファンタジーの特徴を浮き彫りにしてみたい。

ヒステリー患者に現れる症状の一つが、転換ヒステリー（Konversionshysterie⁽¹¹⁾）である。転換ヒステリーでは心的葛藤が身体的な症状として現れ、具体的には発作・知覚喪失・ヒステリー性麻痺などという表現形態を取る。「意識的なファンタジーが無意識的なファンタジーになるや否や、そのようなファンタジーは病的になり得る。つまり、症候や発作に現れ得る。」

この無意識的なファンタジーは、かつては意識的であったものが何等かの理由があって抑圧を受けて無意識に陥る場合が多数である。この「かつては意識的なファンタジーの後裔」は、意識的なファンタジーの内容を現実化することが出来ない場合、無意識的なものとなり、抑圧を被る最大の理由は、個人の性的生活と重大な関係があるからである。実際に満足を得られない場合に意識的なファンタジーは無意識的になり、それが肥大化した時に遂に病的な症候に至るのである。⁽¹²⁾

しかし、ヒステリー症候とファンタジーとの対応関係は単純ではなく、一つの症候の原因は必ずしも一つの無意識的なファンタジーではない。つまり、症候とファンタジーの関連は一対一対応ではなく、一つの症候は幾つかの無意識的なファンタジーの合成物なのである。また、夢の作業での潜在内容と顕在内容と同様の関連が無意識的なファンタジーとヒステリー症候との間にも存在していて、症候は検閲の影響下において無意識的なファンタジーも歪曲や圧縮を受けている。⁽¹³⁾

『ナルシズム入門』の中でフロイトは神経症患者——特にヒステリーと強迫神経症——と精神病患者との対比を行っていて、その件でファンタジーと現実との関連が考察されている。パラフレニー患者 (Paraphreniker⁽¹⁴⁾) の基本的な性格特徴は誇大妄想と外界の人物・事物からの関心の疎隔である。⁽¹⁵⁾ 現実との関連が弱まる状態は程度の差こそあれヒステリー患者や強迫神経症患者にも見受けられる。しかし、精神分析の知見から、ヒステリー患者や強迫神経症患者は「…ファンタジーの中で…一方で彼は実在の対象を彼の記憶の想像上の対象で代理するか、あるいは実在の対象を想像上の対象と混同している。他方ではこれらの想像上の対象で彼の目標を達成するために運動性の行動を起こすことを断念している。」しかし、「パラフレニー患者はそうではない。パラフレニー患者はリビドーをファンタジーにおいて他のもので代理させることをせず、それを外界の人物・事物から実際に撤回してしまったように見える。」⁽¹⁶⁾ ヒステリー患者や強迫神経症患者は外界への関心が稀薄である。しかし、対象の姿がたとえ歪んでいようとも、ファンタジーを介し辛うじて外界との接触は保たれている。これに対してパラフレニー患者は外界との関連を遮断してしまっている。

最後に、神経症の症候から得られた知見を基礎として造り上げられたメタ心理学がファンタジーに与えた定義を纏めると以下ようになる。ファンタジーには、高度に組織され、矛盾がなく、意識体系の形成物と殆ど区別がつかないものが存在する。しかし他方では、無意識的であり、意識されることが不可能であるものも存在している。⁽¹⁷⁾ この定義でフロイトは、意識されているものと無意識のものとの性格の相違よりも、類似性・緊密な関係を強調している。ここでの意識・無意識という言葉は差別化を行うために使用されているのではなく、その由来を明らかにするためだけに使用されている。

c. 芸術論におけるファンタジー

フロイトは精神分析医の他に芸術愛好家としても有名であった。⁽¹⁸⁾ また、芸術愛好家として当然のここのように、彼にも芸術論といわれる一連の作品が存在していて、それらは精神分析の技法を芸術作品の解釈に——特に作家の生涯と作品の関連を解明するために——援用している。ここでは芸術論の中で、ファンタジーがどのような意味合いで使用されているのかを見ていきたい。

幼年時代の抑圧された記憶とファンタジーとの関連性が集約的に考察されているのは『W. イェンゼンの小説『グラディオーヴァ』にみられる妄想と夢』である。この論文の中では主人公の夢の分析にとどまらず、彼の行動と心の動きまでもが精神分析的手法を使って解明されている。分析の結果、主人公の行動と「妄想ファンタジー (Wahnphantasie)」には異なった源を持つ二重の決定要因が存在するとフロイトは結論付けている。

1. 主人公にとって意識的なもの…表層的

源泉は考古学的（学問的）関心：主人公は考古学者であり、学問的対象としてポンペイに憧れている

2. 主人公にとって無意識的なもの…（深層的）⁽²⁰⁾・隠されたもの

源泉は抑圧されていた幼児期の記憶

この二つの流れの妥協の結果、つまり妥協形成（Kompromißbildung）の産物がファンタジーである。妥協形成とは普通、「抑圧されていたものが症状・夢・無意識のあらゆる産物へと回帰する際に、意識に容認されるために借りる形式」であり、抑圧されたものはそれとは分からない迄に歪曲されている。この場合、妥協形成がファンタジーを意識化する機能を担っていて、妥協が成立する時にその記憶はファンタジーとなる。しかし、妥協が成立しても完全な満足が得られるわけではなく、二つの流れの間に葛藤は続くのである。⁽²¹⁾

また、この論文には「妄想（Wahn）」とファンタジーの関係が明確に述べられている箇所が存在する。『ある幻想の未来』に於いて妄想とイリュージョンの関係が記述されているので、ここではひとまず引用と要約だけにとどめて、比較及び考察は次章に送ることにする。この小説の作者であるイェンゼンは主人公の精神状態を「妄想」と名付けていて、フロイトは主人公の妄想の特徴を「ファンタジーが優位に至ったこと、つまりファンタジーが信頼を得て、行動に影響を及ぼしたという事実である」と述べている。無論、フロイト自身もこの二点だけでは妄想の性質を十分に言い尽くすことは出来ないと付言しているが、この記述から、ファンタジーは妄想の前段階ということが出来るであろう。⁽²²⁾

幼年期の記憶とファンタジーの関わり合いを考察してきたが、子供自身が抱くファンタジーについて次に見てみよう。子供とファンタジーの関連は、「家族小説（Familienroman）」を巡る論考の中で言及されている。「家族小説」とは、主体が両親との関係を想像上で変更するファンタジーであり、パラノイアの妄想に特徴的であるが、神経症患者の中にも見出すことが出来る。幼児は成長するに従って、他の子供の両親と自分の両親とを比較をし始め、自分の両親を偉大だと思ふ気持ちが揺いでくる。このような幻滅と、エディプス・コンプレックスにより生じた異性の親に対するライヴァル意識が「家族小説」を発生させる原因である。⁽²³⁾

このファンタジーは、幻滅を感じた両親と自分との絆を断ち切り、大抵の場合は、社会的に高い地位にいる両親と自分の両親とを置換するという内容である。その際、王族や貴族を実際に目撃した等の体験が利用される。そのような体験は「…子供の羨望の念を呼び覚まし、その羨望の念は（自分の）両親を高貴な両親と交替させるファンタジーの中に表現を見付ける」。「家族小説」は意識的なファンタジーであり、いかにも現実にあるような話にするために高度な技術が駆使され、その中には神話などの文学の萌芽が伺える。⁽²⁴⁾

では、大人になるとファンタジーとの関連はどのような変化を遂げるのであろうか。フ

ロイトは『詩人と想像すること』で、作家の創作活動を解明する糸口を探そうとする。詩人自身が明快な答えを与えてくれないので、詩的活動と性質が似たものが分析されることになる。それは子供の遊びであり、「詩人は遊ぶ子供に似ている、詩人は遊ぶ子供でもある」と規定されている。詩人と遊ぶ子供との共通点は、現実 (Wirklichkeit) ともう一つの世界——詩人ならばファンタジーの世界 (Phantasiewelt)、子供なら遊びの世界 (Spielwelt) ——の区分を十分に弁えているということである。そして子供の遊びはいい加減なものではなく、「遊びの反対は真剣さではなく、現実である」⁽²⁵⁾。

では、子供に対する遊びの役割は大人になると一体何によって引き継がれるのだろうか。遊ぶことの役割は、” Phantasieren (空想すること) “に割り振られる。遊びによって一度得られた快感を断念することは非常に困難なので、大人は代償物を探さざるをえなく、成長した人間は「遊ぶ代わりに、今や想像する」のだ。

子供が遊びに接する態度と、大人がファンタジーに対して取る反応は明らかに相違している。子供の遊びは早く大人になりたいという唯一の欲望から発して、遊んでいることを他人に隠そうとはしない。それに対して、大人はファンタジーを恥ずべきものとして他人に隠そうとする。普通の大人はファンタジーの評価が社会的に低く、その背後にある欲望を他者に隠す必要を痛い程承知している。

これらの考察から導かれた「空想すること」の特徴は、1. 幸福な人間は決して「空想しない」。「空想する」のは満足していない人間である。2. 満たされなかった欲望は「空想する」ことの原動力である。ファンタジーは欲望充足であり、満足していない現実の修正である。3. ファンタジーの基盤となる欲望は名誉欲と性的な願望であり、この二つの欲望はしばしば相互的に影響し合っている。要約すれば、ファンタジーは欲望充足であり、満足できない現実と相補関係にある、ということが言えるであろう。⁽²⁶⁾

この論文の中では、ファンタジーは実生活に即したものと見做されている。その点でファンタジーはその時々によって「時間の刻印」を受けていて、欲望を仲介として、過去・現在・未来を駆け巡っていることになる。それと同じように、欲望の方も現在を契機として利用し、過去を雛形として未来の像の輪郭を描こうとする。⁽²⁷⁾

これまでにファンタジーと子供の遊び、大人との関連が考察されたが、ファンタジーと詩人・作家の接点はどのようなものであろうか。その接点を発見するために、白昼夢を見ている人と白昼夢の関連が詩人と作品の関連に類比されている。

白昼夢を見る人は詩人であると言う仮定から、詩人の抱くファンタジーが、先述されたファンタジーと過去・現在・未来の関係を基にして分析される。すると、詩人の幼年期の体験に関する記憶から欲望が生じ、それが創作の原動力になっていると言う結果が導き出される。先に述べた子供とファンタジーの関係をも併せて考えてみると、「白昼夢として

の文芸作品はかつての子供の遊びの継続であり、代理である」とフロイトが同定していたことが明白に伺える。フロイトは幼年期の出来事ではなく、その出来事が喚起する欲望と作品の因果関係を認めている。だが、作家の伝記と作品の関係を過度に重んじる点から、テキストの自律性 (Autonomie) を謳う現代のテキスト理論⁽²⁸⁾には受け入れ難い結果であろう。

さて、これまでの論の展開からすると、詩人のファンタジーと普通の大人のファンタジーには質的な相違は存在しない。詩人を詩人たらしめているのはファンタジー自身ではなく、その表現形式である。自分と他人の自我——換言すれば作者の自我と読み手の自我——の間にある柵を乗り越え、読み手に快感を与えるのに成功する秘訣こそ「Ars poetica (作詩術)」である。その作詩術とは、詩人がエゴイスティックなファンタジーを修正し、隠蔽することと、詩人が自身のファンタジーの描写の中で読み手に与える美的な快感で彼等を魅了することである。⁽²⁹⁾

『精神現象の二原則に関する定式』では短いながら芸術家とファンタジーの関連について重要な見解が見られる。芸術は快感原則 (Lustprinzip) と現実原則 (Realitätsprinzip) を和解させるものであり、芸術家については以下のように述べられている。

芸術家はそもそも現実 (Realität) に背を向けた人間である。何故ならば彼は現実によってまず要求された欲動満足への断念に馴染めず、空想生活 (Phantasieleben) の中でエロティックなそして名誉欲をしたいようにさせておく。彼はしかし、以下のことによりファンタジーの世界から現実への帰路を見出だす。それは並々ならぬ天賦の才のお陰で自分のファンタジーを新たな種類の現実を作り上げることである。その新たな現実⁽³⁰⁾は人間により現実に対する価値ある似姿として通用することが許されている。

恐らく帰る手段を忘れてたり、帰る気がなくなってしまった人が神経症あるいは精神病患者と呼ばれる人達であるということができるとはしないのか。

2. イリュージョン概念

フロイトは特に『ある幻想の未来』と『文化への不満』の中で、宗教について語る場合に「イリュージョン」という言葉を使用している。最初に、イリュージョンという言葉がどのように定義されているかを参照してから、イリュージョンの性質を明確にしたい。

a. イリュージョンの定義

イリュージョンの類義語には、「誤謬 (Irrtum)」という言葉がある。誤謬とは、「ある種の有害な虫は汚物や腐土の類いから生まれる」とアリストテレスが考えたようなことであ

る。イリュージョンは誤謬と同義ではなく、また必ずしも誤謬であるとは限らない。では、誤謬とイリュージョンとの相違点は何であろうか。イリュージョンは、ナショナリスト達がインドゲルマン人は唯一の文化的な民族であるという類の主張であり、人間の様々な欲望から生じている。

欲望との関係という点に於いて、イリュージョンは精神病理学上の妄想(Wahnidee)⁽³¹⁾に近いものがあるが、妄想の方がイリュージョンよりも構造が複雑である。妄想と比較されているのは、何時か王子が求婚にやってくると思い込む平民の娘の話である。妄想は本質的に現実に矛盾するものであるが、一方イリュージョンは実現不可能とか、現実に矛盾している必要はない。事実、平民の娘の例などは歴史上何度も起こっている。メシアが現れ黄金時代を創設するという救済論をイリュージョンと見做すか、それとも妄想に類似したものと見做すかは、判断する側の個人的態度に左右されている。

総括すると、「願望実現が動機づけの中で強力に前面にでた場合、我々はある信念をイリュージョンと呼ぶ。その際、イリュージョン自身が証明を断念しているのとまさに同じ様に、現実との関連を我々は度外視している。」宗教がイリュージョンと呼ばれるのは、人類の最古で、最強で、しかも差し迫った欲望に由来していて、永い間命脈を保ってきた秘密もここに鍵がある。⁽³²⁾

b. イリュージョンとしての宗教

フロイトは「宗教はイリュージョンである」と主張しているが、その「宗教」は一体何を意味するものなのだろうか。宗教を幾つかの構成要素に——例えば思想的内容を示す「信念」・行動面を現す「儀礼」・制度化された集団である「教会」など——区分するとすれば、⁽³³⁾『ある幻想の未来』及び『文化への不満』での「宗教」は宗教思想、特に宗教的観念・教義に該当する。

次に宗教的観念として示されているものを具体的に見てみよう。原始時代から現代までの宗教的観念の展開の中で一番重点が置かれているのは、現世での一切の出来事を支配する、人類および宇宙の創造主である神。自然の脅威や死に対して人間を守り、全ての善行・悪行に対して死後の世界で相応の報いを与えるという神観念である。

ロマン・ロラン (Romain Rolland) との議論の中に、神観念を所有しない宗教に関してのコメントがある。ロランは、「宗教性の本来的な源泉」である「永遠」という感情——彼は「大洋的な (ozeanisch)」感情と名付けている——をフロイトは十分に認めていないと批判する。しかし、宗教の起源をエディプス・コンプレックスと幼児の「寄る辺なさ (Hilflosigkeit)」に似た感情に求めるフロイトは、大洋的感情を「外界全体との解き難い連帯感・帰属感」と解釈し、宗教の源泉であるとは認めない。

また、「非人格的・曖昧で抽象的な原理で神を代理することによって、宗教の神を救っ

たと信じている哲学者達を非難するために、信者達の陣営に混ざりたい⁽³⁴⁾」と皮肉な物言いをしている。ここで宗教として念頭に置かれているのは、『強迫行為と宗教的礼拝』で分析されている荘重な儀礼が伴うローマ・カトリック⁽³⁵⁾と『人間モーセと一神教』で論述されているユダヤ教である。後に『人間モーセと一神教』を執筆し、『トーテムとタブー』の段階からエディプス・コンプレックスから神観念への展開を執拗に唱え続けたフロイトとしては「父なる神」を擁した宗教に拘るのはごく自然の成り行きであろう。

c. 宗教の形成要因

宗教の形成要因を探求するために、個人の心的な発達過程がモデルとして選ばれ、『トーテムとタブー』や『強迫行為と宗教的礼拝』と同じく、個人の心理を集団の心理に類比させるという方法が使用される。『トーテムとタブー』では宗教の起源はエディプス・コンプレックスに求められていた。つまり、「全ては父親—息子関係、つまり神は高められた父親であり、父親への憧憬は宗教的欲求の根源である」。しかし、『ある幻想の未来』では、人間の寄る辺なさという動機が、宗教の形成に最も大きな役割を果たしているという意見に移行している。前者と後者の見解との結節点は、エディプス・コンプレックスは宗教の深層的な動機づけであり、寄る辺なさは顕在的な動機づけであるということにある。

幼児のリビドーはナルシシズム的な欲求に従い、自分に満足を与えてくれる対象に付着する。空腹を満たし、外界の危険から保護してくれる母親は、最初の愛の対象として選択される。しかし、成長に従ってこの機能は父親に取って代られるようになる⁽³⁶⁾。

幼児と父親とのこのような関係は、憧れつつも恐れているというアンビヴァレントなものであり、この状態は幼児期全般に渡って継続する。思春期に差し掛かると子供は、自らは外界の圧倒的な力に対して無力で保護を欠くことができない存在であることに気付く。幼児期の寄る辺なさへの自己防衛の姿勢は大人になっても継承され、この寄る辺なさを解消するために強力な存在に保護を求める姿勢こそが宗教形成の要因である。神々とは、い
うならば人間が保護を委ねるために、外界の力を父親に模して創造したものである⁽³⁷⁾。

これらの考察から、宗教的観念とは寄る辺なさに耐えられるようにという人間の欲望から発生し、個人と人類の双方の幼児期の寄る辺なさの記憶の上に打ち立てられているという結論が得られる。フロイトのいうところのイリュージョンは、人間心理の外界への投影にしか過ぎないのである。

d. 宗教の信憑性

宗教がイリュージョンである理由をその信憑性と関連させて考察してみよう。「イリュージョン」という言葉の含意には何かしら批判めいたものが感じられる。それは、錯覚・欺瞞・幻覚といった、現実に対して「誤った」という意味合いがあるからであろう⁽³⁸⁾。仮に、欲望充足と密接な関連があることだけを表現したいのであれば、夢や芸術を説明す

るのに使用する「ファンタジー」という言葉を宗教にも適用してもよい筈である。そこにわざわざ「イリュージョン」を使用したところにフロイトなりの意図があると推測することが出来る。

フロイトは、宗教的観念、特に教義は「…外的（あるいは内的）現実の事実や諸関係についての陳述である。それ等は我々が発見しなかったことを伝達し、それ等の陳述は信用されることを要求するものである」と規定している。このような要求に対して、「それらは全部イリュージョンであり、証明不可能であり、誰もそれ等が真実であると信じることを強いられてはならない⁽³⁹⁾」と応答している。宗教的観念と夢・芸術論にあらわれるファンタジーの相違点はこの真理要求の有無にある。

確かに神経症の患者達は自分のファンタジーを恰も現実のように思い、現実とファンタジーの境界線が怪しくなっている。だが、他者から強制されてそのような状態になっているわけではない。彼等はあくまでも自らにそう仕向けているのだ。けれども宗教的観念には、人間が主体的にそれを信じるというよりも、寧ろ受動的に信じさせられるという側面が強いのである。宗教的観念と個人の連関ではなく、信じるように強制する力の方が問題視されていて、この事実は終生フロイトが個人と宗教の関連よりも集団現象としての宗教に注目し続けたということに符合している。

真理要求をするには、それに見合うだけの資格が必要であると見做されているのだが、宗教の真理性については、「…なぜ宗教上の教義を信じなければならないのだろうか？ 理性以上の法廷は存在しえない。宗教上の教義の真理 (Wahrheit) はこの真理を証明する内的体験に依存しているとしたら、そのような珍しい体験を持たない大勢の人はどうすればよいのか？」そして、「長い間には理性と経験には何事も矛盾することはできない。そして、理性と経験に対する宗教の矛盾は余りにも明白である。⁽⁴¹⁾」とも述べている。二つの引用に共通して使用されている言葉は「理性」であり、フロイトの言う真理とは誰にでも実証することが可能であり、その実証方法として思い浮べられているものは科学的証明である。更に真理とは理性の審判に耐えうるもので、この審判に耐えられるものだけが信憑性を獲得出来るのである。「理性は最高の法廷」であり、この理性への全幅の信頼はフロイトがしばしば啓蒙主義の思想家の末裔に数えられる所以である。

宗教には理性に基づいているような真理は存在せず⁽⁴²⁾、宗教はイリュージョンであり、その信憑性が極めて疑わしいことが主張された。では、宗教の未来は一体どのようなものと予測されているのであろうか。フロイトは、宗教は悪しき諸制度を是認し、批判的思考を禁じることによって知性を貧困化させる危険なものであり、幸福・自由・真理を脅かすものと見做していた。⁽⁴³⁾『ある幻想の未来』では、宗教を廃止する方向にもたらすことが出来れば、人間の幸福は保証されている式の楽観論に溢れている。宗教に未来はなくとも人⁽⁴⁴⁾
⁽⁴⁵⁾

類、また宗教を包括する文化の未来は約束されているのだ。しかし、この三年後に書かれた『文化への不満』には文化そのものに対する絶望感が漂っている。

3. 集団的現象としての宗教

イリュージョンとしての宗教の特質を素描してきたが、ここでは宗教が批判されるべき理由を集団との関連に於いて考察してみたい。集団が社会的・心理的に分析されている『集団心理学と自我の分析』に於いては、個人と集団を対立させるのではなく、集団の裡に現れる個人の精神構造に焦点を合せてあり、リビドーという概念が集団を分析する際に導入されている。リビドーとは「欲動のエネルギーで愛と呼ばれるものに関連」するものである。⁽⁴⁶⁾

フロイトは集団の形態を以下の四点において二分している。

流動的	不等質	自然発生的	単純 ⁽⁴⁷⁾ な
持続性あり	等質	人工的	高度に組織化されている

上記の表の上の系列はフロイト以前の研究者によって分析された集団の形態——群衆——であり、フロイトが考察対象としたのは下の系列、具体的に言えば軍隊やカトリック教会のような指導者が存在する集団である。このような集団を選出した理由は、「群衆」では隠蔽されている「ある関係」が観察しやすい形態で現れているからである。

「ある関係」は、指導者を巡る成員の相互関係に端的に現れている。カトリック教会に於いてはキリストの前で教徒は皆平等であり、軍隊では司令官への愛故に兵士達は皆戦友になる。指導者と成員の間柄は父子関係に譬えられ、成員達は指導者から平等に愛されていると思ひ込む。指導者との結び付きが成員同志の結束を誘発し、「…このイリュージョンの効力がなくなれば…教会も軍隊もすぐさま崩壊する」と予測されている。⁽⁴⁸⁾ 集団精神の本質は「愛の関係」、換言すれば「リビドー的关系」であり、これが集団形成の無意識的基盤である。

リビドー的結合は、「同一化」と「惚れ込み」という概念を通して更に分析されている。同一化 (Identifizierung) の最も理解し易い例は、イリュージョンとしての宗教の項で少し触れたように、幼児、特に男児と父親との同一化である。エディプス・コンプレックスが発生する以前の幼児の両親との心理的な結び付きは対象選択と同一化の二種類であり、幼児は母親を愛情の対象として、父親を「父のようでありたい、そうなりたい」という理想像とする。父親への「同一化は、自我を『手本』とされた他者と同じように形作るべくする努力」なのである。

このような人間の成長過程に普遍的に見られる同一化の他に、同一化の対象と主体との性的な関係が度外視されている場合が存在する。この種の同一化は頻繁に見受けられ、同

じ状態に身を置こうとする能力・意志に基づいている。この場合、「自我は他者の自我に、ある点に於いて重要な類似を知覚して…同一化を形成する⁽⁴⁹⁾」のであり、集団に於ける成員同志の共通性が集団を維持するのに重要な役割を果している。

性的目標から外れた欲動に起因した他者との感情結合のもう一つの在り方が「惚れ込み (Verliebtheit)」である。惚れ込みとは、目的が達成されると消滅する。つまり、性的目標が禁じられた場合にそのような状態が発生するのである。

惚れ込みと同一化の相違点は自我の様態にある。同一化を通して自我は対象の特性を修得して自身をより豊かにすることができ、たとえ主体が対象を放棄したとしても、対象は同一化を通して主体の自我の中で再建され、主体の自我は部分的に変化を被る。それに対して惚れ込み状態では、愛する対象の「性的な過大評価」と、主体の謙遜・自己毀損という現象が見受けられ、その原因は対象の「理想化 (Idealisierung)」の働きに求められる。主体の対象へのこのような「献身 (Hingabe)」は、主体の自我理想の機能を停止させ、その批判能力は低下する。その結果、対象は常に正当なものとなり、主体の良心が作動しなくなる。惚れ込みでは指導者が成員の自我理想の代理となるが、同一化では「全ての個人は多数の集団の構成要素であり、同一化を通して多面的に結合されていて、自我理想を極めて様々な模範にしたがって打ち立て」、成員の自我理想は自我と対象の間の同一化を通して発生する。従って、同一化と惚れ込みでは自我に対する自我理想の位置が相違していることになる。⁽⁵⁰⁾

この区分を基盤として、軍隊とキリスト教会という集団を再解釈すると以下のようになる。軍隊では兵士達は指揮官に「惚れ込んでいて」、常に指揮者の命令には従順であり、仲間同志では主に共通点から発生する同一化が成立している。一方、教会ではキリストが理想となり、キリスト教徒達もそのような同一化を通して結び付けられている。しかし、教会は教徒により厳しい要求を突き付ける。教徒は自身をキリストに同一化し、キリストが全ての教徒を愛するように、他の教徒を愛さなければならない、と。さりながら、教徒にはキリストのように万人を愛することなどは到底可能ではない。⁽⁵¹⁾

エディプス・コンプレックスを抑圧するものであり、「父親のようであらねばならない」という理想と「父親のようであることは許されない」という禁止を含んでいる自我理想は父親への憧憬を基盤として成立する。自我理想はあらゆる宗教の萌芽であるが、フロイト⁽⁵²⁾の叙述からはメランコリーに見られるような人間に苛酷な要求をする病的な自我理想が神の姿に投影されているという印象が拭えない。

4. 文化に於ける宗教の役割

文化に対する疑惑の眼差しは『文化への不満』で始めて向けられたものではない。『ある幻想の未来』の中でも既にその姿勢は見受けられる。最後に文化の夫々の構成要素——とりわけ芸術と科学——と宗教の関係を考察したい。まず、フロイトによる文化の定義と文化の人間に与える影響から始めていこう。

フロイトは文化について次のような考察を展開している。文化は人類が動物の存在条件を超える手段として把握され、端的に言えばそれは自己保存のシステムである。自己保存のシステムには二つの機能が存在していて、一つは自然に対する自己維持、もう一つは人間関係の組織化である。⁽⁵³⁾しかし、「…あらゆる個人は潜在的に、普遍的人間的な関心であるはずの文化の敵」であると規定されている。人間は一人では生きられないが、共同生活を可能にするために文化が要求する様々な犠牲を苦痛と感じる。それ故に、諸制度は自然支配と共同生活の維持という機能の他に、文化を維持する役目を背負っている。「全ての文化は労働の強制と欲動の断念に基づいていて、従って、これらの要求をされる人々に於いて反対が避け難く起る、という認識と共に以下のことが明らかになった。…財貨と並んで今や文化を保護するのに役立つ手段、つまり強制手段と、人間が文化と宥和し、その文化の犠牲に対して賠償をすることに成功するべく他の手段が登場する。後者は文化の精神的な所有として見做される。⁽⁵⁴⁾労働強制と欲動の断念という二つの要求が苛酷なので、その補償をするのが文化の精神的な面というのだ。では次に文化への敵意が生じる過程を具に見てみよう。

まず、文化側の不備が指摘される。文化が我々に要求する事と、それによって誘発される状態は、1. 欲動が満足させられない事態…拒否 (Versagung)、2. 拒否を固定する制度…禁止 (Verbot)、3. 禁止が引き起こす状態…不自由 (Entbehrung) である。代表的な拒否されるべき事柄は近親相姦と食人と殺人であり、これらの欲動願望が禁止され、制度化されることによって人間は原始状態から抜け出す。この欲動願望を断念することに拒否反応を示し、不自由さを感じるのは神経症患者や子供達である。⁽⁵⁵⁾

強制的に禁止が行われれば、不満が高まってくることは必定である。メタ心理学の見地から解釈すると、子供は成長するに連れて超自我の働きにより、外部からの強制——特に両親の命令・禁止——を内面化 (Verinnerlichung) して、道徳的あるいは社会的な存在になっていく。しかし、超自我を通して集団レベルに於いて様々な禁止を内面化しても、禁止によって発生する不自由さが解消されることは依然としてない。神経症とは、文化の理想を達成するための欲動断念に耐えられなかったことの証明であり、欲動断念の量を減らせば人間は幸福になるのではないかという考えも文化への一種の敵意の表現である。⁽⁵⁶⁾

フロイトは文化の不備に起因する人生の辛さに対する麻酔剤という観点から、宗教と芸術と学問の意義を解釈している。その麻酔剤は三種類に大別される。一つは惨めさを軽減させる強力な気晴らし。二つ目は代理満足。三つ目は惨めさを感じさせない興奮剤である。学問は第1番目の気晴らし、芸術は第2番目の代理満足に属し、現実には劣らない効力を所有している。残りの宗教の役割は一体何であろうか。まず、芸術についての考察から見て行こう。⁽⁵⁷⁾

前章で取り扱ったように、快感を得て不快を避けようとする快感原則と、現実には即して快感原則を変化させていこうとする現実原則との宥和を独特な方法で執り行なうものが芸術であるとの見方がなされている。これは特に、芸術家にとっての芸術の意味である。それでは、芸術家と受容者の双方にとっての芸術の意味は何であろうか。

芸術はその文化圏内に所属する人々に満足を与えるが、欲動断念に対する代理満足という性質を持つ。それは、「洗練されていて、高尚」であるが、粗野で一次的な欲動の動きが満足させられた場合と比較すると稀薄化されていて、この方法で人生の苦痛を全て払い除けることは出来ない。また、教養のない大衆には縁遠いものである。⁽⁵⁸⁾

確かにフロイトは芸術に高い評価を与えている。しかし、芸術を創造するにせよ享受するにせよ、それに見合っただけの才能・教養が必要であると主張される。⁽⁵⁹⁾この種の見解からは、ごく一般の人には芸術は程遠いものであるという教養主義や天才崇拜の影がちらついているように思える。だが、現代と違い、19世紀に古典古代の文化を規範とした教育を受けた世代としてはこの考え方は寧ろ当然のことであろう。

また、芸術の持つ特殊性が逆にその評価に繋がっているとはいえないだろうか。つまり、弱められた満足しか提供できなく、且つ少数の人しか享受できないということは、同時に人々への影響力が薄く、狂信的にならず現実を見誤ることがないということを意味している。理性を恒常的に維持していられることが啓蒙主義者の末裔である彼には好ましく思えたのだ。フロイトがいう「芸術」は穏健なもので、当時の文化を脅かしかねない過激な性質ではなかった。それとも宗教という、より危険な存在の前には芸術は色褪せてしまったのだろうか。いずれにせよ芸術に対する彼の理解は一面的であり、彼自身もそれをよく承知していた。

『精神現象の二原則に関する定式』には、宗教と科学の関連について綴った箇所が存在する。

宗教は、…来世での生活における報償の約束と引き換えに現世での絶対的な快感断念を遂行出来るのである。けれども宗教は、この方法で快感原則を克服するには至らなかった。最初にこの克服に成功したのは科学である。しかし科学もまた作業の間に知的

な快感を提供し、最終的に実際の利益を約束するだけである。⁽⁶⁰⁾

科学の業績は、我々の外側の現実を認識させてくれる唯一の方法であり、「我々の科学はイリュージョンではない」のだ。科学の未来はこの時代では未だ信用されていた。フロイトには、科学が肥大化して人間自身の制御通りにはいかなくなる、人間の生活を脅かすといった予感⁽⁶¹⁾は果してあったのであろうか。

最後に、宗教は「人生の目的は一体何か」という問いに答えられ、人生の理念という思想と切り離せないものであるとされている。しかし、その評価は芸術・科学より可成り厳しいものである。宗教は幸福を得るために現実世界に妄想を持ち込むという一種の集団妄想であり、妄想に囚われている人間は決してそれが妄想であることに気がつかない。「妄想」と見做されているということは、最上級の非難と言えよう。尤も、芸術と科学に対しての評価は『文化への不満』では他の著作に比べて決して高くない。それは、この著作で文化一般に悲観的な評価がなされているからであろう。

結 語

以上で、フロイトの宗教論及びテキスト内の関連事項を概観してきた。リクールは、精神分析は必然的に偶像破壊的であるという命題を立て、フロイトの宗教に対する精神分析はその退行的性格を明るみに出すことに尽きていると断言している。そして、宗教については二つの主題が語られていて、一つは宗教儀式と強迫神経症との類似点であり、もう一つは宗教の持つイリュージョン的な性格である。イリュージョンはエディプス・コンプレックスに起源を有している。宗教は父親の持つ全能性を神に投射するが、その事実を隠蔽するためにイリュージョンを利用する。イリュージョンの働きとは、父親の似姿を神として現実に指定することである。更に、フロイトが宗教を批判の対象とするのは、信仰と欲望が隠れた関係を持つ故だとしている。また、「イリュージョンとしての宗教はもはや個人的なファンタジーではなく共同のイリュージョンである」としている。⁽⁶²⁾

リクールの考察も交えて、ファンタジーとイリュージョンの関連及び、イリュージョンが批判される理由を明確にしてみたい。リクールが指摘した、「個人と共同」という言葉が重要なポイントであろう。ファンタジーは個人に関連する現象であるが、イリュージョンは集団に関連していることは『集団心理と自我の分析』でも明白になっている。しかも、イリュージョンは集団形成の要因であるリビドー的結合に一役買っていて、集団内で批判力が低下する原因にもなっている。宗教にもこれと同じ作用があるとフロイトは考えていて、宗教——特に神——は、自我に残酷な仕打ちをする自我理想の役割を担っている。

ファンタジーとイリュージョンは何れも妄想とは相違している。しかし、どちらかとい

うとイリュージョンの方が妄想により近い。妄想は、個人が耽溺している場合は社会に対して余り危険はないが、集団に関わると忽ち危険性が出現する。フロイトはあくまでも集団としての宗教現象だけに注目し、個人と宗教の関係には殆ど言及することはない。

ファンタジーは現実と相違しているが、現実にも劣らない価値を有し、現実と相補的な関係にある。しかし、イリュージョンは実現可能性が極めて薄く、しかも現実と相入れない。この場合、フロイトの評価の基準は現実⁽⁶³⁾に即しているか、または現実と関連が深いかということである。必ずしも存在したかどうかは分らないが、存在しなかったとしても現実と何等かの関連がある幼児期の記憶とファンタジーの評価からもそれは分るのである。

イリュージョンである宗教は信じることを要求し、自己が真理であると説く。それに対して、ファンタジーである芸術また夢や神経症の症候は信仰することを強要せず、真理要求をしない。この場合の「真理」とは理性に適う、科学的検証に適うことである。

また、ファンタジーの中でとりわけ芸術は昇華の場であり、そこで使用されるエネルギーは「脱性化した」ものである。フロイトは男性の同性愛者と母親との関係について、「温和な同性愛者の観察はこのような同一化が優しい対象選択の代理であり、それは攻撃的で敵意に満ちた態度を分離したものであるという推測を裏付けている」と述べている。⁽⁶³⁾ 芸術に対してフロイトは上記の同性愛者と母親の関係に類似して、社会にとって有益でありしかも無害であるものと考えている。しかし、宗教は彼にとってエディプス・コンプレックスを継承して人間を抑圧する危険なものなのだ。

フロイトの宗教観はこれ迄で見てきたように余り多面的では無い。個人に及ぼす影響、特にアイデンティティ形成に宗教が役立つことなどは想像だにしないことであっただろう。また、宗教批判を行ったが、宗教自身の持つ社会に対する批判機能には全く言及していない。ハーバーマスは芸術と宗教とを並列させ、それらは公共的コミュニケーションの水準では全体から切断され、すなわち批判を免れて存在しているので支配の合理化の為に使用される。しかし、イリュージョンの中にはユートピアが含まれており、以下のような場合に批判機能を発揮するとしている。それは技術が発達して社会的に必要な抑圧を引き下げる可能性が生じたときに、宗教と芸術が歴史的に旧弊と成った支配形態への批判へ変換され得るとする場合である。⁽⁶⁴⁾

フロイトは果してこの事実に気が付いていなかったのだろうか、それとも気付いていても意識化する際に何かに抑圧されてしまったのだろうか。

いずれにせよ、フロイトの宗教批判は所謂「啓蒙主義的な」立場からなされた、現代から見れば陳腐とも言えるものである。しかしながら、強固に宗教を批判したその裏には、宗教と人間の関連が何如に根深いものであるかということを充分に承知していたことが伺える。この関連についての論述は新たな機会に譲るとして、本稿を終えることにしたい。

註

使用略号

Stu.A. :Sigmund Freud:Studienausgabe. S.Fischer Verlag. Frankfurt. 1969-79

G.W. :Sigmund Freud:Gesammelte Werke (18Bände) Bände 1-17. London 1940-52.,
Band 18. Frankfurt am Main 1968. Die ganze Edition seit S.Fischer Verlag.Frankfurt.
am Main

L.P. :ラブランシュ・ポンタリス『精神分析辞典』(村上仁監訳, みすず書房, 1986年)

- (1) フロイトには宗教を主題とした論文が他にも存在するが、この二論文に於いて特にその色彩が濃厚である。
- (2) L.P., p.114.
- (3) Habermas 1988,S.269-70.ハーバーマスは、フロイトが夢を非病理的な情動の正常な手本と捕らえたことを指摘している。夢は病理現象を解釈する上でのモデルであった。また、リクールも同様の見方をしている。cf.Ricœur 1965, pp.161-77;174-94頁
- (4) Stu.A., Bd.2.,S.280-1.尚、潜在内容と顕在内容の関連は、隠されたものと物語られたもの、翻訳とテキストの関係に譬えられるが、翻訳がテキストに忠実であろうとするのに対して、夢の作業では潜在内容は歪曲を被る。ミルネール、30-1頁参照。
- (5) 「圧縮」については以下を参照。Stu.A., Bd.2., S.282-304。「置き換え」については以下を参照。ibid.,S.305-8。「形象性への配慮」については以下を参照。ibid.,S.335-44。「二次加工」については以下を参照。ibid.,S.470-87.
- (6) L.P., p.380.
- (7) Stu.A., Bd.2., S.473-4.相違点としては、白昼夢は夢よりも二次加工の影響が強く、シナリオの統一性が高いことである。Vgl.Stu.A., Bd.6., S.189.
- (8) Ibid., S.472-4.
- (9) フロイトが創始した心理学の理論的側面がメタ心理学であり、臨床的経験から幾分離れた概念的モデルを構築している。そして、力動論・局所論・経済論という3つの視点が考慮に入れられている。cf. L.P. pp.436-7.
- (10) Stu.A., Bd.2., S.546.
- (11) ヒステリー患者には、不安ヒステリーと転換ヒステリーという2つのタイプの異なった症状が明確に現れる。これらについて詳しくは以下を参照。cf.L.P.,pp.343, pp.393-4, pp.410-11.
- (12) 転換ヒステリーの名称に冠せられた「転換」とは、「ファンタジーを身体表現に転換する」という意味合いである。Vgl. Stefan.S.28-31.
- (13) Stu.A., Bd. 6., S.190-3.
- (14) L.P.,pp.381-3.

- (15) Stu.A.,Bd.3.,S.41-3.尚、ここではクレペリンのいう早期痴呆、プロイラーが言う精神分裂症と名付けているものがパラフレニーと考えられている。c.f. L.P.p.383
- (16) Stu.A., Bd.3., S.42.
- (17) Ibid., S.149.
- (18) Krüll ,S.244-5.
- (19) 『グラディーヴァ』はW.Jensenの1903年の作品である。主人公はN.ハーノルドという考古学者であり、幼馴染みの女性に纏わる幼年期の記憶が摩訶不思議な夢と妄想を引き起こすという展開である。フロイトの詳細な分析については以下を参照。Vgl. Stu. A., Bd.10., S.13-83.
- (20) フロイトはテキストでは深層的という言葉を使用していない。この語は表層的に対応するものを筆者が当てはめたものである。
- (21) L.P., pp.246-9, pp.306-7.
- (22) Stu.A., Bd.10., S.44-5,55-6.
- (23) L.P.,pp.57-8.
- (24) Stu.A., Bd.4., S.223-6.また、英雄に関する神話にも家族小説と同様のシナリオが見受けられる。vgl. Stu.A., Bd.9., S.464.
- (25) Stu.A., Bd.10., S.171.
- (26) Ibid.,S.173-5.リクールは"Phantasie"に当たる次の二語を区別している。"la fantasie"は現実の記憶と結び付いているもので、未来とも関連することができる。一方、"la fantasma"は無時間的なものであり、フロイトはこの違い分けをしておらず、ファンタジーの本質を見誤っているとしている。cf. Ricœur 1965,p167; 180-1頁
- (27) ファンタジーが欲望を中軸として過去と現在と未来と関連しているということから、ファンタジーはユートピア機能を所有しているという意見が存在する。ファンタジーが欲望と関連していると言うことは、現実肯定よりも現実否定の姿勢が伺え、そのことにより、よりよい未来を志向していることになる。この現実否定と転倒と変革という点に於いてユートピアと同様の機能があるというのだ。Vgl.Hesse. S.136-43.
- (28) 例えば、デリダやシュタインツェルなど。作者の意図を探るといって従来の解釈方法に対して、その様な解釈を否定したもので、作者の匿名性が強い理論である。
- (29) Stu.A., Bd.10., S.172.176-8.ミルネール、110-17頁参照。
- (30) Stu.A., Bd.3., S.21-2.
- (31) Vgl.Habermas 1988,S.339-40.この箇所についてハーバーマスはイリュージョンは 文化的伝承として妄想とははっきり区別されていると主張しているが、リクールは妄想 とイリュージョンとの差異は程度の差でしかないとしている。現実との葛藤が妄想では 明白であり、イリュージョンでは隠蔽されているところがその差異である。リクールにはフロイトの宗教論に就いて異議を唱えているのだ。cf.Ricœur 1965.pp.226-49; 253-80頁。
- (32) G.W.14., S.352-4.

- (33) 宗教の区分法には M.Müller,W.James,Malinovski,Wach のものなどがあるが、ここでは Durkheim に依拠した。Vgl.Durkheim.1912
- (34) Stu.A., Bd.9., S.197—209. Vgl.G.W. 14.,S.343,361
- (35) Stu.A., Bd.7., S.11—21.
- (36) G.W.14., S.342—46.
- (37) Stu.A., Bd.9., S.311—369, Vgl.Hesse, S.57—65.
- (38) 例えば、辞書の“Illusion”の項目には「幻想・幻覚・幻影・（間違った）思い込み・欺瞞・錯覚・幻覚的空間表現」とある。（「小学館独和大辞典」より）また、R.G.G.によると17-8世紀には舞台や絵画の技法として使用された言葉であることが分かる。
- (39) G.W.14., S.347,352.
- (40) フロイトは宗教だけではなく、文化の持つ強制力をも考察した。人間がいる限りこの強制力から逃れられないが、かといって文化全体を廃止してしまおうという考えには至らない。Vgl.Stu.A.Bd.9,S.266. ミルネール、248-9頁参照。
- (41) G.W.14., S.350,378.
- (42) Hesse, S.55—7.
- (43) G.W.14., S.367—8,370—80.
- (44) Morris. p.163.フロイトは信者達はこの様な論を発表したくらいでは態度を変えないであろうと述べている。そこから彼は宗教の批判はするが強行論者ではないことが分かる。
- (45) G.W.14., S.372.
- (46) Stu.A., Bd.9., S.85, cf., L.P.,pp.274—5, pp.485—6.尚、集団心理学の基礎付けに就いては以下を参照。Vgl. ibid. S.63—5,68—9,71,80.
- (47) “primitiv”という言葉が当ててある。本来ならば「原初の」という意味だが、ここでは構造が簡単という意味にとったので「単純な」とした。
- (48) Ibid., S.88.
- (49) Ibid., S.94,98—100.Vgl.Stu.A., Bd.3., S.298—9.フロイトの同一化の概念の不備について、モスコヴィッツは、子供の両親への同一化だけが論述されていて、両親から子供への同一化が言及されていないことを指摘している。cf.モスコヴィッツ、403-5頁、ジラール、268-71頁。
- (50) Stu.A., Bd.9., S.105—7.
- (51) Ibid., S.120—6.
- (52) Stu.A., Bd.3., S.301—5. cf,L.P. pp.177—9.
- (53) G.W.14., S.326—7,336—7.ハーバーマスはフロイトの文化の捕え方がマルクスに類似していることを指摘している。彼によればマルクスもフロイトも自然過程の技術的処理の状態を示す生産力と生産関係を区別している。Vgl.Habermas. S.336
- (54) Ibid., S.331.Vgl. ibid., S.327,Habermas S.,337—8
- (55) G.W.14., S.332—3.

- (56) Stu.A., Bd.9., S.246.
 (57) Ibid.,S.206-8.
 (58) Ibid.,S.218., cf. Stu.A., Bd.3.,S.17-24., L.P., pp.38-9,pp.128-9.
 (59) G.W.14. S.334-5. 尚, フロイトの芸術論についてはリクールに詳しい。cf. Ricœur 1965
 pp.165-77;178-194頁。
 (60) Stu.A., Bd.9.,S.211-2.
 (61) Stu.A., Bd.10., S.22.
 (62) Ricoeur 1965,pp.210-227, pp.226-49;227-244,253-74頁
 (63) Stu.A., Bd.3., S.304, Vgl. Stu.A., Bd.3., S.60-3,Stu.A.,Bd.,10.,S.89.
 (64) Habermas. S.339-40

参考文献

フロイト著作

- 1900 : Die Traumdeutung, Stu.A., Bd.2.
 1907 : Der Wahn und die Träume in W. Jensens "Gradiva", Stu.A.,Bd.10 : 11-85
 1907 : Zwangshandlungen und Religionsübungen, Stu.A., Bd.7 : 11-21
 1908 : Hysterische Phantasien und ihre Beziehung zur Bisexualität, Stu.A., Bd.6 : 188-195
 1908 : Der Dichter und das Phantasieren, Stu.A., Bd.10 : 171-179
 1909 : Der Familienroman der Neurotiker, Stu.A., Bd.4 : 221-226
 1910 : Eine Kindheitserinnerung des Leonard da Vinci, Stu.A., Bd.10 : 88-159
 1911 : Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens, Stu.A. Bd.3 :
 17-24
 1913 : Totem und Tabu, Stu.A., Bd.9 : 287-454
 1914 : Zur Einführung des Narzißmus, Stu.A., Bd.3 : 37-73
 1915 : Das Unbewusste, Stu.A., Bd.3 : 119-162
 1920 : Jenseits des Lustprinzips, Stu.A., Bd.3 : 231-271
 1921 : Massenpsychologie und Ich-Analyse, Stu.A., Bd.9 : 61-134
 1923 : Das Ich und das Es, Stu.A., Bd.3 : 273-325
 1927 : Die Zukunft einer Illusion, G.W., 14 : 323-380
 1930 : Das Unbehagen in der Kultur, Stu.A., Bd.9 : 191-270
 1939 : Der Mann Moses und monotheistische Religion, Stu.A., Bd.9 : 455-581

上記の著作は"Der Familienroman der Neurotiker"を除いて1968-74『フロイト著作集』全十一巻、人文書院、と1969-76改訂版『フロイト選集』全十七巻、日本教文社、に収録されているが、既訳を取らなかった。

フロイト研究及び他の参考文献

Durkheim, Emile 1912 : Les formes elementaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie, Paris.

Girard, René 1972 : La Violence et la sacré.Paris

『暴力と聖なるもの』古田幸男訳、法政大学出版局、1982.

Habermas, Jürgen 1988 : Erkenntnis und Interesse, Frankfurt am Main

Hesse, Bettina 1981 : Religionskritik und Ästhetik, Frankfurt a.M.

Krüll, Marianne 1979 : Freud und sein Vater. München

『フロイトとその父』水野節夫、山下公子訳、思索社、1987

Laplanche, Jean/Pontalis, J.-B. 1967 : Vocabulaire de la Psychanalyse,Paris

『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1986

Milner, Max 1980 : Freud et l'interprétation de littérature, C.D.U.—SEDES, 1980

『フロイトと文学解釈』市村卓彦訳、ユニテ、1989

Morris, D. 1987 : Anthoropological Studies of Religion, Cambridge University Press, London.

Moscovici, Serge 1981 : L 'âge des foules, Paris.

『群衆の時代』古田幸男訳、法政大学出版局、1984

Ricoeur, Paul 1965 : De l 'interprétation. Essai sur Freud, Paris.

『フロイトを読む—解釈学試論』久米博訳、新曜社、1982

Stefan, Achim 1989 : Sinn als Bedeutung—Bedeutungstheoretische Untersuchungen zur Psychoanalyse Sigmund Freuds,Berlin.

Die Phantasie und die Illusion

—Eine Betrachtung der Kunsttheorie und der Religionstheorie von Sigmund Freud—

Hiroko Taguchi

In "Die Zukunft einer Illusion" und "Das Unbehagen in der Kultur", wo Freuds kritische Stellung zur Religion ihren Ausdruck findet, wird das Wort "Illusion" in bezug auf die Religion verwendet, das Wort "Phantasie" dagegen in bezug auf die Kunst, den Traum und die Symptome des Neurotikers. In diesem Aufsatz habe ich die Absicht, die Beschaffenheit der Religionskritik von Freud zu erklären, indem ich den Unterschied zwischen den beiden Wörtern herausarbeitet.

Die Phantasie ist im Traum ein Bestandteil des Traums, der sich auf den Ausgangspunkt und das Endziel des Traums bezieht. Bei den neurotischen Symptomen verbindet sie den Neurotiker mit der Außenwelt. In den Abhandlungen über die Kunst wird die Phantasie als das Produkt der "Kompromißbildung", die das Lustprinzip mit dem Realitätsprinzip versöhnen läßt, angesehen. Die Phantasie hat nämlich eine innere Relation zur Wunscherfüllung. Die Kultur schränkt ihre Mitglieder in der Wunscherfüllung ein, um sich selbst zu erhalten. Statt der Erfüllung ihrer Wünsche bietet sie ihnen, vor allem in der Kunst, eine Ersatzbefriedigung. Die Kunst, so wie Freud sie sich vorstellt, ist in die etablierte Ordnung eingefügt, sie wird ihr nämlich nicht gefährlich.

Die Illusion muß nicht notwendig unrealisierbar sein, aber sie kann ohne Rücksicht auf das Verhältnis zur Realität existieren. Sie übernimmt für die Menschen die Rolle einer Schutzfunktion. Während die Religion den Gläubigen Trost gibt, führt sie in starkem Maße zur "Verdrängung": Gott ist für die Gläubigen sowohl das Ichideal als auch das Liebesobjekt. In diesem Zustand funktioniert das Ich der Gläubigen nicht, deswegen sinkt die Kraft der Kritik im Ich. Außerdem fordert die Religion von ihnen, sie für die Wahrheit anzusehen. Die Religion besteht in der falschen Forderung auf Wahrheit und in der Verdrängung des Ich und in dieser Hinsicht kritisiert Freud die Religion.